

# 非思量

NO. 270

## ぼねん かんぜおん 暮念観世音

『延命十句観音経』を学ぶ その9

暮れなずむ町の光と影の中 去りゆくあなたへ贈る言葉  
悲しみこらえて微笑むよりも 涙かれるまで泣くほうがいい  
人は悲しみが多いほど 人には優しくできるのだから

この歌詞は昭和の歌謡曲、海援隊の歌う「贈る言葉」の一節です。主題歌となったテレビドラマの影響で卒業式の定番曲となりましたが元は作詞の武田鉄矢さんの失恋が題材になっているそうです。

大好きな人との別れは、誰にとっても辛く悲しい事です。

お釈迦さまは夕日を背にして説法されたといひます。夕日の沈む頃、人々の心は素直になり、真実の教えはその心の深いところに届きます。

自分はこれまでどのように生きてきたのか。昨日の自分、今日の自分はどうかであったか。こういうことを考えるのにもっともいい時間は夕暮れ時（黄昏時）です。周囲がだんだん暮れていくにしたがって、人間の心は自分に返っていきます。真面目になり、淋しくなり、恋しくなり、涙もろくなります。

「朝（あした）に観世音菩薩を念じ、暮（ゆうべ）に観世音菩薩を念ず」

今日一日がそこで閉じられます。閉じようとして、さてどんな一日であったかと顧みる時、その一日が惜しまれます。良かれ悪しかれ、去る時は去るばかりで、その一日を呼び戻すことはできません。一日といういのちを惜しむことになります。これは人が物を惜しむ気持ちと同じなのです。

大事にしてきた物が、古くなり、色あせ、傷ついて、捨てるか焼くかしてしまおうときに、共に歩んだ歳月が思われて、耐え難い気持ちになります。現代のように物が豊かだと、物を惜しむという気持ちにはなかなかなれませんが、今日という一日を見送る思いと重ねて考えれば、おろそかにしていいことではないように思います。

一日を見送れる人は一年を見送れる人であり、自分の過去をあたたかい眼差しで振り返られる人です。

自分の中の観世音菩薩と出会うためにも、日暮れの時を大切に過ごしましょう。